

会師市牧小苦

醫師

児玉

進

登校拒否といじめ

今や「登校拒否はどこの家庭の子どもにもおこりうる」というのが定説である。特定の家庭の「問題児による問題行動」ではない。登校拒否というイメージについて言えば「うちの子に限って」はありえないのである。では登校拒否はどのようなにしてあなたの子どもさんに起こるのだろうか？初めのうちは朝になると頭痛がするとか、おなか

種々のストレスが原因

が痛い、吐き気がする、時には吐くなどの症状のどれかを訴えるようになり、そのために毎朝学校を休むようになるので、親は何かの病気ではないかと心配して病院を訪れる。症状はかぜや自家中毒症または胃腸病の初期に似ているため、暫定的にそのような病名のもとに治療を受けることが多い。しかし病状ははかばかしくなく、両親が「ぐ

あいが悪いなら今日は学校は休みなさい」と病欠欠席が決定されると、朝からの頭痛や吐き気はしだいによくなっていき、学校がひける時間の午後二時から三時には、全くいつもの元気に戻り、また日曜日など学校が休みの日は、朝から頭痛も吐き気もなく、うそのように元気になるといった特徴がある。学校に行かなくなってしまう

たわが子に、親は動転し何とか学校へ行かせようと説得し、親子げんかから鼻血が出るほど殴ってしまったケースもある。しかも夜にはあすこそ学校へ行くといつて、あすの時間割の準備をしてから眠ることもあり、親を期待させたりするが、その期待は一〇〇%裏切られて翌朝もまたぐあいが悪くなり、学校を休むことになる。

彼は仮病を使っているのだろうか？いや彼は朝になると本当に頭が痛いのであり、吐き気がするのである。それは先生を含めた学校の問題や友人（いじめなど）あるいは自分の家庭から受けるストレスから、脳血管が収縮したり、首や頭の筋肉が強く収縮するからであり、ストレスが吐き気の中樞を刺激するからである。彼は本当は「学校へ行きたいのであり、行かぬほならない」と固く決意しているのだが、ストレスによる不安や恐怖のために「学校へ行けない」子どもなのである。

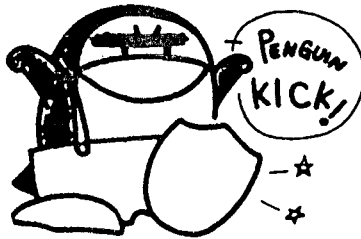
登校拒否の子どもは種々のストレスとのかっとうのため、学校へ行きたいけど学校へ行けないかわいそうな子どもたちであることを理解していただきたい。そのストレスの原因の第一位はいじめにより深く傷ついた場合であり、第二位は教師から受けるもの、第三位は家庭内のものという順といわれている。

登校拒否といじめ

わが子の登校拒否に直面した親は自信を失い、ひどくうろたえるのが普通であるが、このような登校拒否の初期こそ大切なのである。特に気をつけなければならぬ対応としては①親による形だけの登校のすすめやお願い、暴力的登校（腕ずくで学校へ連れて行くのは問題をこじらせ登校を遅らせる元凶となる）②教師の登校を促すだけの家庭訪問（子どもが最も恐れ嫌うことである）③教師や級友による朝のお迎え（一見、友情や先生の心くばりの様に見えるがストレスの原因かも知れない教師や友人が「学校へ行こう」と迎えにくるようなもの。ストレスが家まで押しかけてくることになるのである）。

わが子の登校拒否に直面した親は「自分たちの育て方が悪かったのか」と反省し、動揺がちであるが、そのような自信のない態度で、わが子をリードすることはできない。専門家に相

談するとともに、自信をもって冷静に事に当たることが大切である。



お問合せは、苦小牧市医師会
電話 33-4720へ